



TITLE:

ロングフィールドの価値論と分配論(上)

AUTHOR(S):

堀, 經夫

CITATION:

堀, 經夫. ロングフィールドの価値論と分配論(上). 經濟論叢 1932, 35(4): 498-511

ISSUE DATE:

1932-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130236>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號

第三十五卷

昭和七年十月一日發行

論叢

賣上税に依る奢侈課税……………法學博士 神戶 正雄

利子歩合の理論……………文學博士 高田 保馬

ロングフィールドの價值論と分配論……………經濟學博士 堀 經 夫

政治算術附地方算法に就きて……………法學博士 財部 靜 治

所得に關する疑義……………經濟學博士 汐 見 三 郎

研究

中央銀行の獨立性に就いて……………經濟學士 松岡 孝 兒

カルテル法への要望……………經濟學士 磯 部 喜 一

說苑

職業と營利……………經濟學士 岡崎 文 規
アダム・スミスの經濟社會の本質に就て……………經濟學士 竹 中 靖 一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

ロングフィールドの價值論と分配論（上）

堀 經 夫

マウンティフォート・ロングフィールド (Mountifort Longfield, 1802—1884) は、嘗てオクスフォード大學の經濟學講座擔任教授 (the Drummond Professor of political Economy) の地位を占め後にダブリンの大僧正となりたるリチャード・ホイットレイ (Richard Whately) がダブリン大學に創めて設けた經濟學教授職に最初に就いた人である。彼れの主なる著書は次の如くであるが、其の中私が本稿で取扱はうとするのは最初の『經濟學講義』(一八三四年)である。

- 1) *Lectures on Political Economy, delivered in Trinity and Michaelmas Terms, 1833-1834*; reprinted in 1931, as No. 8 in series of reprints of scarce tracts in economic and political science.
- 2) *Four Lectures on the Poor Laws, 1834.*
- 3) *Three Lectures on Commerce, and One on Absenteeism, 1835.*
- 4) *Irish Land Tenure*. (contributed to a volume of Coluden Club Essays. 1870.)

彼れの學說について重要なものは、價值論と分配論とである。以下これ等のものを順次に略説することによつて、彼れの學說史上の貢獻を明かにするであらう。

一 勞働價值説 ロングフィールドは、價值と效用との意義を述べたる後に、これ等兩者の關係を論じて曰く、

「何等かの效用を有たないならば、或る物が價值を有ち得ないことは、明白である。何故ならば、何等かの缺乏又は願望を充たし得ない物に對しては、何人も對價を與へ若しくは勞働を投じようとはしないであらうから。併し一旦或る效用を取得するならば、その物の價值は該效用の程度に依存するのではなくて、寧ろ他の諸事情によつて定まるのである。而してこの事情の研究こそは、經濟學の甚だ重要な一部門を構成する。……富の素材は總て有用であると共に有價值でなければならぬ。併し經濟學原論が主として關與するのは其の價值であつて、其の效用ではない。それ故に、經濟學は價值の學問又は交換の學問¹⁾ (the science of values, or the science of exchanges) と呼ばれ來つた²⁾。」

これはスミスやリカードと全然同一なる立場を示すものである。併し彼は、『經濟學は理論經濟と實際經濟との二部門に分たれ得るであらう。前者は價值を取扱ひ、後者は效用を取扱ふ、』との言葉によつても分る如く、政策論の研究目標としては效用に重きを置いたのである。又彼は、『價值と效用との間の相反的對照 (antithetical contrasts) が説かれてゐるが、それは概ね誤つて居る。この講義を進めるに従つて、吾々は恐らく、總ての實際的目的のためには、效用を測定する最上の尺度が價值であることを、知るに至るであらう、』と述べて、スミスなどの缺點を補つた。

併し乍ら、彼が其の『經濟學講義』に於て中心問題となしたのは、矢張り、價值を取扱ふ所謂理論經濟の部門であつて、それは、他方の所謂實際經濟の部門に先んじて研究さるべきもの、即ちこの部門に比して『一層基本的であり、且つ一層大なる確定性を有する』が故に、この部門研究の爲めの根本の方針を授けるといふ重要な役目を果すもの、と看做されたのである⁵⁾。然らば、この理論經濟學の基本的研究對象たる價值——『價值は一物が他の諸物と交換される力である』⁶⁾。——について、彼は如何なる理論を説いたか？

1) 先きに述べたホエイトリイ大僧正が、オクスフォード大學での講義(1831)に於て、經濟學なる名稱の代りに交換學 (Catalactics, or the science of exchanges) なる名稱を用ふべしと主張したことは、有名な話である。

2) Lectures on Political Economy, p. 26.

3) Ibid. p. 27.

4) Ibid.

5) Cf. ibid.

6) Ibid. p. 26.

彼は勞働が價值の最上の——唯一のではないが——尺度である理由を述べて、次の如くいって居る。即ち、

『一層研究を進めると、勞働が價值の尺度として特に適當して居る所以を、次の事實の中に見出すことが出来る。それは、製造品の如き多くの品物について觀るに、粗生原料品の價值以上に出づる其の全價值は、其の生産に使用された勞働に由來しそれによつて測定され得る、といふ事實、及び粗生原料品についてさへ、其の或る部分は、その貨物の或る他の部分——其の價值は生産に必要な勞働の分量に由來するか或はそれによつて測定され得る——と、常に價值を等しうする、といふ事實を指す。全然勞働によつて生産されるその部分は、それを生産したる勞働の分量によつて、其の價值を測定せしむることが出来、それ自體は殘餘の部分の價值の尺度として役立つのである。若しこれが正しいならば、……勞働は價值の最上の尺度である。何故なれば、それについて吾々が價值を知らんと欲する各地の重要貨物に對して、この尺度は直接に適用され得るか或は間接に比較され得るからである。』

これに由つて觀れば、彼が、貨物の價值の尺度として勞働が最上のものであることの理由として、大多數の貨物——或は少くとも同種貨物の他の部分の價值測定の基準となる部分——の生産に勞働が投下せられることを挙げたるは、明かであらう。即ち彼にあつては、リカアドウなどに於けると同じく、勞働による價值決定論と價值尺度論とは、必然的に結びついてゐたのである。

次に彼は、同種貨物の各部分の生産に必要な勞働の分量がそれぞれ異なる場合に、その貨物全體の價值の決定標準となるのは如何なる部分であるか、について論じて曰く、

『任意の貨物につき、其の價值がかくの如くにして(投下勞働によつて)測定されることを許容するその部分は、私が最も不利なる事情と呼ぶ所の事情、即ちその貨物の或る一定量を生産するために勞働の最大支出を必要とするが如き事情の下に於て生産せられたその部分である。殆ど總ての貨物の生産價格或は自然價值 (the production price or natural value) は、このや

うにして測定されることが出来る。⁸⁾』

即ち彼は、所謂最大(又は限界)生産費説——或は一層正確にいへば、最大(又は限界)投下労働價值説——を主張したのである。勿論、彼は、『稀少性より其の全價值を取得し、其の生産に従事する労働より之を取得せざる、或る特殊の貨物、或は一層適切にいへば、それを生産するに一定量の労働の支出を必要とするといふこと以外の原因のために、供給が制限されて居る貨物』は、この原則の適用を受けないものとなした。而してこの種の貨物の價值は、『其の稀少性及び購買者間の競争の程度に應じて、如何なる價格にまでも騰貴又は下落し得るが、併し『經濟學はこれ等の貨物と殆ど交渉を有たないのである。』⁹⁾』

二 需要供給説

ロングフィールドは以上の意味に於ける價值を『自然價值』又は『生産價格』と呼び、これ等に對して『交換價值』又は『市場價格』なる概念を立てた。而して兩者の關係を述べて、自然價值は自然が人間に貨物を供給するその價格である。それは製造業者が貨物を生産するに當つて目標とする價格であり、交換價值又は市場價格は絶えずそれに一致せんとする傾向を有つて居る、¹¹⁾』といった。

そこで問題は、この交換價值又は市場價格は如何にして決定されるか、といふことになるのであるが、ロングフィールドはこれを説明するに先立つて、價值といふ名稱はこの交換價值又は市場價格に附せられる方が、自然價值又は生産價格に附せられるよりも、一層適切である、となし

8) Ibid. pp. 34-35. 括弧内の句は堀補入
9) Ibid. p. 35.
10) Ibid.
11) Ibid. pp. 36-37.

た。¹²⁾ 故に彼にあつては、交換價值又は市場價格の決定論——それは需要供給説である——も亦、價值決定論であつたのである。

ロングフィールドの交換價值又は市場價格決定論は、今述べた如く需要供給説である。故にそれは、結局、『交換價值は供給と有效需要との間に平衡を齎らすであらう所のその價格である、』といふ命題に歸著する。併し乍ら彼は、この命題中に含まれて居る供給と需要とをそれぞれ左右する事情を實質的に説明したる點に、著しき特徴を示してゐる。これ私が彼れの需要供給説を特に解説せんとする所以である。

彼は先づ效用遞減の事情を説いて、交換の發生を論ずると共に、又需要と供給とに言及した。

曰く、

『價值を左右する事情の穿鑿に成功せんとすれば、吾々は交換を惹き起すものは何であるかを考察しなければならない。或る貨物が如何ほど有用であり、又は人間の生存にとつて如何ほど必要であらうとも、或る個人がそれを消費し得る分量には限度がある。而して變化の愛好又は必要は、彼をして彼が一定の分前以上に所有する總ての物を手離さしめるであらう。若しもこれを手離すことによつて彼が自分の享樂により、多く資する何物かを得し得るならば。而して自然の巧妙なる配劑によつて、或る貨物が人間の生存又は幸福にとつて不可缺であればあるほど、吾々の其の消費を拘束する限度は一層嚴格であり又絶對的である。……かくて人間の性質と理性とは彼を驅つて交換に導くこととなり、彼は自分で消費し切れない剩餘を彼れの享樂に資すべき或る物をそれと引換へに彼に與へることの出来る人へ、讓渡するであらう。……かやうにして、交換に當つては、二人の人と少くとも二つの物が關係してゐなければならぬ。而して或る人が所有し之を消費しようとなし、或る貨物のその部分を、供給と呼び、それと引換へに何物かを與へんとする他の人の意向を需要と呼ぶことが出来るやう。』¹⁴⁾

12) Ibid. p. 36.
13) Ibid. p. 37.
14) Ibid. pp. 44-45.

この章句は、效用遞減の事實が交換を惹き起し、茲に供給と需要とが立ち現はれることを説いたものであつて、未だ特に效用——限界效用——と需要價格との關係を明かにしたのではない。併し乍ら後に彼が、

『價值に關して私が論じたのは、各貨物の價值は需要と供給とに依存すること、及び或る貨物の生産費並びに效用は間接に其の價格に影響を及ぼすことであつた。生産費は供給の側に影響を及ぼす。蓋し人々は、貨物の生産費以上の價格でこれを賣却するといふ合理的期待を以てゐなければ、貨物を生産しないであらうから。又效用は、數字的に容易く計算は出來ないけれども、價格に或る結果を與へる。蓋し需要が由つて來るのは、全く、廣義に於ける貨物の效用だからである。』¹⁵⁾といへるを觀れば、貨物の效用が需要を通して交換價值又は市場價格に影響することを、彼が漠然と認めたることは、明かであらう。

そこで吾々は、供給を左右する事情と需要を左右する事情とについて、彼がそれぞれ如何なる實質的説明を加へたか、を觀なければならぬ。最初は供給の側を左右する事情であるが、彼は、これこそは先きに述べた自然價值又は生産價格——即ち限界的投下労働量——そのものに外ならない、となすのである。彼はこのことを『經濟學講義』四七頁以下に於て論述して居る。併し今は其の引用を省き、たゞ彼が、『製造財貨については、『粗生原料品及び特に食物』についてよりも、『交換價值又は市場價格が自然價值に一致せんとする傾向が一層強い』ことを、供給の弾力性の大小によつて説明して居ることを指摘するに止め度い。¹⁶⁾

次は需要の側を左右する事情である。前述の如く、ロングフィールドは需要を惹き起す根本的

15) Ibid. p. 110.
16) Ibid. pp. 49-57.

原因として效用遞減の現象を説明した。併し此處では、かくの如くにして發生したる需要の烈度 (intensity of demand) と市場價格との現實的關係が、論ぜられるのである。而してこの點について彼が適用したのは、所謂限界需要の學說である。惟ふに、限界效用の法則と限界需要の法則とは、本質上同一物でなければならぬ。併し彼は效用遞減の思想を限界效用の思想にまで十分に發展せしめ得なかつたから、従つて彼によつて説かれた限界需要價格の學說は、必ずしも彼れの效用遞減の思想と密接なる關係をもたないのである。

併しそれはさて置き、吾々は彼れの限界需要の學說を觀なければならぬ。彼は先づ、人を異にするに應じて需要の烈度が異なること、及び市場價格を左右するのは烈度の最も小なる需要の提出者であることを論じて曰く、

『食料品及び必要の程度をそれぞれ異にする他の品物に對する需要の烈度は、人を異にするに従ひ、彼等が都合よく提供し得る他の品物の異なるに應じて、一樣ではない。而も彼等は總て同一率で即ち市場價格で購買を行ふであらう。而してこの率は有效需要と供給との間に平衡を齎らすであらう所の額によつて決定されるのである。で、今若し價格がこの額以上に一度 (one degree) だけ高められやうとするならば、この變化によつて購買者たることを中止する需要者は、正に以前の價格によつて測定されたるその烈度の需要を有する者に違ひない。この變化がなされる以前には、これよりも烈度のより小なる需要は購買場裡には現はれなかつた。而してこの變化がなされた以後にも、これよりもより大なる烈度の需要は尙ほ購買場裡に現はれるであらう。かくて市場價格は、烈度に於て最も小ではあるが而も實際の購買場裡に現はれる所のその需要によつて、測定されるのである。若しも現在の供給が、一定の烈度に等しいか或はそれを越ゆる所の、總ての需要を充たして、なほ餘りがあるほど豊富であるならば、價格は下落して烈度のより小なる需要に適合するに至るであらう。』¹⁷⁾

次に彼は、同一人の有する需要も其の烈度を異にすること、及び市場價格を左右するのは其の

17) Ibid. p. 113.

最小の烈度であることを論じて曰く、

『需要の烈度は、處を異にし人を異にするに應じて變化するばかりではない。多くの場合に、同一人も烈度を異にする數個の需要を有つて居ると言ひ得られるであらう。其の甚だ顯著なる例は、食料品が稀少又は豊富のために價格の變化を蒙る場合である。食料品の價格が騰貴すれば、消費の減少が起る。併しこの消費減少は、通常、或る人々は食物の消費を全然中止し、残りの人々のみが慣習上の分量を消費する、といふ方法で行はれるのではない。之に反して、總ての人が引續き食物を消費する——否、消費しなければならぬ、左もなくば死んで仕舞ふ——。たゞ、食物の價格の騰落には我關せず焉の富める人々を除き、他の人々は平常通り之を消費しないだけのことである。國內に於ける全供給が減少する毎に、多數個人の消費についてそれだけの減少が起らなければならない。而して各個人の消費に於けるこの減少の直接原因は、稀少の結果たる價格の騰貴である。さて或る人が價格騰貴の結果として消費を中止するその部分、即ち若し價格が下落すれば彼が消費するであらうその附加部分、——これに對する彼の需要の烈度は、彼をして購買を中止せしめる高き價格よりも、一層低くなければならず、而してそれは彼をしてこの部分を消費せしめるであらう所のその低き價格に、正に相等しかるべき筈である。他方に於て、高き價格にも拘らず彼が引續き消費するその部分に對する彼の需要の烈度は、少くとも、彼をして購買を中止せしめなかつた高き價格に、相等しかつたに違ひない。これ以上に稀少度が順次に高まり従つて價格が順次に高まる場合を想像して、右の如き考へ方を進めて行くならば、次のやうな結論に到達するであらう。即ち、各人は、謂はゞ自分自身の内に、順次に増大する烈度を有する一列の需要單位を包藏して居るが、任意の時に購買場裡に現はれるその最低烈度の需要單位とそは、富者にとつても貧者にとつても正確に同一であり、且つこれが市場價格を左右する所のものである。……私は食料品の例を擇んだが、それはこれが最も明瞭で分り易い例であるからであり、又これが其の説明にかゝる原則の實例を最も頻繁に示すものであるからである。併し同様の觀察は、これほど著明にではないにしても、或る品物の供給減少が其の使用を全然放棄せしむることなく、たゞ或る個人の消費に減少を惹き起すが如き場合には、常に等しく妥當する。』¹⁸⁾

以上によつて、吾々は、ロングフィールドが貨物の供給の側を左右する事情の論述に當つては

限界生産費説を、又需要の側を左右する事情の論述に當つては限界需要説を、主張したることを知り得るのである。惟ふに、限界てふ概念を斯くも廣く採用したるは、彼を以て嚆矢とすべく、彼れの學史上の功績は之を没却し得ない。而も彼れの限界概念は、次に述ぶる利潤論にも適用されるのである。

三 分配論一般 ロングフィールドは、其の『經濟學講義』の序論に於て、『社會の異なる階級へ

の富の分配は、從來餘り注目を惹かなかつたやうであるが、併しこれは經濟學に於ける最も重要な主題である、¹⁹⁾といひ、スミスやウェストの分配理論を要約して大體次の如く述べて居る。即ち、

一、スミスの分配論は甚だ曖昧である。併し彼は、『勞動者は、其の自然的又は慣習的必要品の如何に應じて、その國の狀態が繁榮に向ひつゝあるか衰微に向ひつゝあるかに従ひ、或は豊かに或は貧しく生活する、』といふことから、富の分配を分解し始め、次いで『普通の製造業に於て、勞動者にこの支持を與へた後に殘留するものが、利潤として雇主の手にはいる、』と論じ、而して最後に、『農業はこれよりもより大なる生産物を產出する、而して勞動者への通常勞賃及び農業者への通常利潤を差引いた後に殘留するものが、自然的に地代として地主によつて要求され受領される、』となした。故にスミスの分配の考察順序は、『第一勞賃、第二利潤、第三地代』である。²⁰⁾

二、次にウェストは、地代に關する正しい理論の最初の發見者として有名であるが、『彼は地代理論の基礎の上に利潤理論を樹立した。』それによれば、『耕作されて居る最劣等地の生産力が利潤率を左右する。即ち、かゝる土地の生産物は、その國の普通の農業勞動者並みに彼れの勞動者を支持したる後に、農業者に歸屬する、』といふのである。故にウェストの分配の考察順序は『第一地代、第二勞賃、第三利潤』である。²¹⁾

而して當時英國に於ては第二のウェストの學説が支配的であつたけれども、ロングフィールドは、『自分はこれに承服し得ないことを發見した、』となし、『利潤の問題に一層正當なる解釋を與へ、從

19) Ibid. Preface, pp. v-vi.

20) Cf. ibid. p. vi.

21) Cf. ibid. pp. vi-vii

つて所得の源の正しき分析がなされ得る唯一の順序は、第一地代、第二利潤、第三勞賃なることを示す』のが、彼れの『講義』の大眼目である、と述べた。²²⁾

以上は分配問題に對するロングフィールドの根本的態度であるが、これはスミスやウェスト——或は寧ろスミスやリカードウ——の態度に比して明瞭なる對照をなすが故に、吾々の大なる興味を惹かすにはおかないであらう。即ち彼は、(一)地代を以て價值——即ち限界生産費——の外に出づるものと看做したる點に於て、スミスと異なるが、ウェストやリカードウと一致し、又(二)價值の分配を考へるに當つて先づ控除さるべきものは勞賃ではなくて利潤であると主張したる點に於て、ウェストやリカードウと異なるのである。以下順次に、彼れの地代論、利潤論、及び勞賃論の特徴を略解することによつて、これ等の點を明かにするであらう。

四 地代論 ロングフィールドは、地代成立の根本的原因としては、『土地の供給が限られて居ること』を擧げるを以て足るとなし、²³⁾而して地代の大きさを論じて、『第一に、土地の地代は其の肥沃度と位置、及び農産物の價格に依存する。第二に、農産物の生産費或は自然價值(原文には自然價格となつて居る——堀註)は、最大量の勞働を以て栽培されるその部分を生産する費用に依存しそれによつて左右される、』²⁴⁾と言つた。彼はこれ等の命題について詳しい説明を加へて居るが、要するに、彼が地代原因論としては獨占價格説を、又地代増進論としては收穫遞減の法則(註)及び限界生産費の理論に支持せられたる差益地代説を、抱懷してゐたことは、明白である。

(註)ロングフィールドが收穫遞減の法則を確認したことは、夙にキャンナンの指摘せる所であるから、此處にはこれを再説²⁶⁾

22) Cf. *ibid.* p. vii.

23) Cf. *ibid.* pp. 135-136.

24) *Ibid.* p. 136.

25) Cf. *ibid.* Lecture VII.

26) Cannan, *Theories of Production and Distribution*, pp. 173-174.

しない。

故に、彼が、『地代は土地生産物の高き價格に基因するか、或は生産物の高き價格は地代によつて惹き起されるか、或は兩者互に作用し影響し合ふか？』との問の中、第一問に對してのみ肯定的答へを與へ、『確かに地代は、少くとも價格に影響するといふ意味に於ては、生産費の如何なる部分をも構成しない』²⁵⁾といひたるは、蓋し當然であらう。

五 利潤論 かくて問題は利潤と生産費(或は自然價值)との關係如何といふことになるのであるが、彼は價值の中から勞賃と利潤とが支拂はれなければならないことを述べた後に、

『茲に利潤といふ新要素が生産費の中に導き入れられるのを見る、それ故に生産費は勞働と利潤とより成る、と言はれるかも知れない。併し此後吾々が進んで勞働と利潤との各異なる種類を考察し比較するに及んで、吾々は「生産費は勞働より成る」といふ命題と、生産費は勞働及び利潤より成るといふ命題とは、共に相等しいこと、或は同じ意味に理解されなければならないことを、發見するであらう。而して恐らく、生産費を勞働のみに還元さるべきものと考へ、而して利潤を以て、勞働者が其の生産に貢獻したる品物が賣れるまで彼れの給料を得られないものとすれば、その場合に彼が要求するであらう所の、その増加された勞賃に、相等しきものと考へることは、時に一層便利であらう』²⁶⁾

といつて居る。この章句では、價值の實體としての勞働と、勞働力の價值としての勞賃とが、概念的に混同されて居るから、其の解釋はやゝ困難であるが、前に述べた彼れの勞働價值説などゝ合せて考へれば、彼が、生産費或は自然價值の實體としては勞働のみを採用し、既成價值の中から利潤が勞賃と共に支拂はれるものと看做するたることは、略ぼ明かであらう。

然らば、『資本家と勞働者との間の契約を左右し、而して立法上の干涉がない場合に、過去の勤

27) Longfield, *ibid.* p. 118.

28) *Ibid.*

29) *Ibid.* pp. 39-40.

勞と現在の勤務との成果を、利潤と勞賃とに分配する所の原則は、如何なるものであるか？³⁰⁾この問題を考へるに當つて、ロングフィールドは、ウェストやリカードと異り、勞賃ではなくて利潤を先きに觀察しなければならぬとなすのである。何故なれば、勞賃の大小は利潤率の如何によつて定まる——反比例的に——からである。

さて利潤の本質は何であるか？ 又利潤の大きさは如何にして定まるか？ 前者については彼は所謂打歩説又は時差説の先鞭をつけ、又後者については所謂限界生産力説の先驅をなして居る。而して『資本と利潤とは元本と利子とに非常に類似して居る³¹⁾』との彼れの言葉によつても明かなる如く、彼は利潤論に於て事實上今日利子論と呼ばれて居るものを説いたものと看做して可い。

先づ打歩説又は時差説の萌芽と看做さるべきものを示す彼れの章句を引用せんに、彼曰く、

一、『資本については、本來、富を自分の直接の満足のために消費する代りに、之を資本として使用する、富の所持者によつて提供せられる所の、將來のための現在の犠牲以外には、生産費なるものはない。この犠牲の分量は、時を異にし國を異にするに従ひ、又同じ時及び國に於ても人を異にするに従つて、著しく不同である。多くの場合に於てこの犠牲は甚だ小である。何故なれば、吾々は、多くの人が何等利潤を豫期することなく、ただ蓄積愛好の念又は現在よりも將來を選ぶ念のみよりして、貯蓄をなして居るのを見るからである。他方に、多くの人は、彼等が資本として使用し得ることを知つて居る物を、彼等の現在の満足のために支出して居る。併し乍ら、彼等の蓄積よりして利潤を獲得することが出来るといふこの見込は、貯蓄に對する強烈なる附加的動機である。』³¹⁾

二、『利潤の低下は多くの便益を伴ふ。慣習的低利潤率の第一の最も直接的且つ顯著なる結果は、總ての金錢的投機に於て將來と現在とを殆ど相等しき重要さを有つものとなす、といふことである。……或る現在の便益と將來の便益とを比較するに當つて、若し其の各々が享樂の時にコストする(Cost)であらう價格によつて測定さるべきものとするならば、この期

30) Ibid. p. 162.
31) Ibid. p. 196.

間内に現在の便益の價格より得らるべき利潤に相當するだけ、比較上の斟酌が加へられなければならない。若し利潤率が年二割であるならば、一は現在享樂さるべく他は一年後に享樂さるべき二つの便益は、其の價值の比例が五對六である時に、相等しき現在價值を有つわけである。蓋し現在の 100 磅は一年の終りには 120 磅とされるであらうから。利潤率が一割であるならば、比例は一一對一〇でなければならず、五分ならば二一對二〇である。かくて利潤率の減少に伴つてこの比例は益々等一に接近する。³²⁾』

第一の章句中に於ける、『資本の生産費』なる概念は、可なり曖昧であるが、これは、『資本それ自體の有する價值以上に出づる價值、』換言すれば、『勞働と資本との生産物の價值の中より、資本に對する利潤として分配さるべき部分、』の意と解釋されなければならないであらう。かくて吾々は、兩章句を通じて彼が利潤(或は寧ろ利子)に關する打歩説又は時差説——これはシイニョアの節慾説と相通するものを有つて居る——を説きたることを、知り得るのである。

次は、利潤率が何故二割、一割、或は五分といふが如き或る大きさに定まるか、といふことに關する、彼れの限界生産力説である。彼は資本の效用——勞働者に勞賃を前拂し、勞働者の生産能率を高める——を述べた後に、次の如く言つて居る。即ち、

『或る機械の使用に對して支拂はれ得る額は(或る資本の使用に對して支拂はれ得る利潤の大きさは、と書き改めることが出来る——堀註)、勞働者の作業を援助する其の能率によつて決定されたる最高限度を有し、他方其の最低限度は、不注意を伴はずして而も最小の能率をしかあけ得ない所の、その種の資本の能率によつて決定される。』『各産業的企業に使用される資本の利潤は、其の水準を見出さなければならず、而してこの水準の高さは、自然的に最も小なる能率を以て使用されるその資本の利潤によつて、決定されなければならない。』³³⁾

以上と同様の論旨を示す章句は、他に多くあるが、これだけでも、彼が所謂限界生産力説を抱

32) Ibid. pp. 229-231.

33) Ibid. P. 188.

懷せしことは、既に明白であらう。たゞ問題は、彼れの全理論體系中に於ける打歩説又は時差説と限界生産力説との相互關係如何といふことである。セリグマンはロングフィールドの打歩説を紹介したる際に、『これ等の章句を觀れば、かのボエム・バウエルクによつて利子に關する「生産力」説と「打歩」説との間に劃された所の極端なる對照が、如何に誇張的のものであるかが、明白である。何故なれば、吾々は此處に——少くとも一人の學者の所論中に——「打歩」説の言葉を用ひて生産力説が説明されてあるのを見るからである。これ等のことは總て、吾々を驅つて、この輝ける奧太利の經濟學者と英國に於ける彼れの先輩達との間の差異は、普通に想像されて居るよりも、遙かにより、少いものである、との結論に到達せしめる』³⁴⁾といつて居る。

惟ふに、セリグマンのいへる如く、利子に關する打歩説又は時差説と生産力説との關係を全く絶縁的のものと觀るのは、誤つて居るであらう。併し乍ら、これ等の説が『一人の學者の所論中に』述べられて居ることを理由として、其の差異を甚だ微小なるものゝ如く考へるのも、同様に正しくないやうである。蓋し、打歩説又は時差説に於ける時差 (Zeitdifferenz) なる概念の中には、現在財と將來財との間の生産力の差異といふが如き思想は、理論上全然含まれてゐない、或は寧ろ含まれてはならないが故である。故に、ロングフィールドによつてこれ等兩説が論述されて居ることは、必然彼れの全體系に於ける理論上の不統一を意味するものと言はなければならぬ。ただ私は、彼れの打歩説又は時差説を以て利潤(又は利子)の本質を論ずるものと解し、而して彼れの限界生産力説を以て利潤(又は利子)の大きさを論ずるものと解することによつて、聊かなりともこの不統一を緩和せんと試みたのである。(未定)

34) Seligman, Essays in Economics, p. 114.